

研究テーマ

病棟看護師のオンライン家屋訪問
～回復期リハビリテーション病棟における実態調査と今後の課題～

病 院 名

医療法人社団健育会 湘南慶育病院

演 者

^{なかにしおる}○中西薫(看護師) 吉楽初美(看護師) 花田亜美(看護師)
山田健治(看護師) 辻弘美(看護師) 千葉直美(看護師)

概 要

【緒言】

家屋訪問は退院後の生活を見据えた環境調整や指導に重要であり、看護師は多くの視点で提案をしており看護師の同行が有効とされている。しかし、病棟では多様な業務を担っており、移動時間を含む現地同行の調整が難しい。当院ではDXを推進し、病棟にスマートフォンが普及したことを契機に、オンラインで家屋訪問へ参加する新たな方法を導入した。看護師が専門性をもって家屋環境や生活動作を確認することで、より具体的な退院支援につなげることができると考える。本研究ではオンライン家屋訪問の実態と課題を明らかにする。

【目的】

本研究は、回復期リハビリテーション病棟でのオンライン家屋訪問における病棟看護師、セラピスト、家族の評価から実態と今後の課題を明らかにする。

【方法】

1. 回復期リハビリテーション病棟で実施したオンライン家屋訪問において、病棟看護師、セラピスト、家族にアンケートを実施。また、病棟看護師・セラピストへのインタビューを行い、逐語録はKJ法で分析した。
2. 患者と家族へ研究目的・意義・方法を文書で説明し同意を得た。

病棟看護師とセラピストへ研究目的・意義・方法を口頭で説明し、アンケート回答とインタビューをもって同意を得たものとした。

【結果】

オンライン家屋訪問は4件実施され、接続時間は平均27.5分であった。アンケートは、病棟看護師4名、セラピスト4名、家族4名から得られた。病棟看護師・セラピストのインタビュー分析では、事前の多職種打ち合わせがある場合に運用が円滑で、病棟看護師の専門的視点が家屋調整に有用であった。一方、感覚的な情報は伝わりにくいという課題が示された。

画像や音声の乱れは一部にみられたが、いずれも軽微であり、家屋環境や動作の把握には支障がなかった。移動時間が不要となることで、病棟看護師の業務効率は向上していた。家族アンケートでは、看護師の説明が安心感につながる肯定的意見と、撮影への抵抗感や接続側の声への不快感など否定的な意見がみられた。

【考察】

オンライン家屋訪問は、看護師の専門的視点が多職種連携を補完し、退院後の生活を具体的に捉える支援につながっていた。また、技術的課題が軽微であり、看護師が病棟にしながら家屋環境を把握できる有用な方法であった。一方で、感覚的な情報の伝わりにくさや、家族のプライバシーへの配慮不足が不快感につながる場面もあり、事前説明や信頼関係の構築が重要であると示唆された。

【結論】

オンライン家屋訪問は多職種での情報共有がタイムリーにでき、退院後のサービス調整や指導を行う上で効果的に活用できる。特に、病棟看護師の介入が家族の新たな気づきや安心感につながる。

また、画像や音声の乱れは軽微で、オンライン家屋訪問は実現可能性あり、介入時間の短縮につながる。